大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について
――その体系化のために――

李　淑姫

キーワード：虎明本、接続助詞、ホドニ、ニヨッテ、包含関係、階層

要　旨

狂言台本虎明本の原因・理由を表す接続表現形式には、ホドニ、ニヨッテ、トコロデ、アイダ、ニヨリ、ユエニなど、多様な形式が使われている。先行研究ではおもに文体的側面からこれらの形式を個別的に考察してきた。本稿では、これらの形式間に一定の包含関係が成立することに注目し、この包含関係がそれぞれの形式の階層性によっていることを明らかにした。その結果、ユエニ、ニヨリ、ニヨッテは文の構造上、内側の階層に属し、トコロデ、ホドニ、アイダは外側の階層に属するということがわかった。本稿の考察により、虎明本の原因・理由を表す接続形式は、文体差だけでなく、階層をもっており、この階層という観点から体系的に把握できることが明らかになった。

0. はじめに

狂言台本虎明本には、現代日本語のノデ・カラのように原因・理由を表す接続表現形式（以下因由形式と呼ぶ）として、複数の形式が使われている[1]。虎明本に使われる因由形式とそれぞれの用例数は以下の通りである。

（表１）虎明本に使われる因由形式（代表的な形式だけをあげる）

因由形式	ホドニ	ニヨッテ	已然形バ	トコロデ	アイダ	ユエニ	ニヨリ
用例数	1822	277	202	95	72	16	14

表１を見ると、ホドニが圧倒的な勢力を見せている中で、他にもいくつかの形式が用いられているということがわかる。虎明本にこのような多様な因由形式が使われているのは、中世日本語の因由形式が多様であったことの反映であると思われる。上の表でも言えることであるが、狂言台本に限らず、抄物、キリシタン資料などの中世の口語資料から、中世の代表的因由形式はホドニであるということが先行研究によって確認されている。またホドニは中世末期になると著しく衰退し、ニヨッテがその代わりを務めるようになってくるともいわれている。

本稿では、このような多様な中世日本語の因由形式がどのように位置づけられるのかに

ついて考えてみる。虎明本を中心として、中世日本語の因由形式間に見られる包含関係に注目し、現代日本語において指摘されている従属句の階層的分類と関連づけて、中世日本語の因由形式を体系的に整理してみたい。

1. 先行研究

1.1. 小林千草1973

小林1973は、抄物やキリシタン資料、狂言台本など中世の資料を口語的なものと文章語的なものに分類しながら、それぞれの因由形式の分布を調査している。これによると、中世の因由形式はまず文体的観点から以下のように分類される。

（表２）

口語的表現	ホドニ・ニヨッテ・トコロデ
文章語的表現	アイダ・ニヨリ・ユエニ

さらに小林1973は、同じく口語的表現に分類されるホドニ、ニヨッテの間にもその上接語と後件の構成において、違いがあるということを指摘している。小林によると、虎明本において観察されるホドニとニヨッテとの違いは大筋で次のようである。

a．ニヨッテは、（イ）動詞・助動詞（指定ヂャ・過去完了タ・打ち消しヌ）（ロ）形容詞・助動詞（尊敬ルル・ラルル等・丁寧マラスル・マスル等）に下接しており（ハ）推量・意志・希望を表す助動詞群に下接することはない。ホドニにはニヨッテのような制限がなく、（イ）（ロ）（ハ）すべてに下接する。

b．ニヨッテの後件として、推量・意志・命令・依頼がくる例は見えないが、ホドニにおいては、このような制約はない。

このように小林1973は、虎明本に用いられる多様な因由形式には、文体的違いだけでなく、接続する前件、後件の構文的性質に何らかの違いがあることも明らかにしたという点で大きな意義がある。しかし小林の目的は因由形式の体系的把握でなく史的変遷の様相であり、このような性質に対する考察は因由形式全般に拡張されず、ホドニとニヨッテだけにとどまっている。虎明本の因由形式を体系的な観点でとらえようとする本稿の立場では、小林の分析を他の因由形式にも拡張し、ホドニとニヨッテにみられるような差が全体的に見られるかどうか、そしてそのような差があるとしたら、それはどのような体系の中で考えるべきであるかということを見てみたい。

1.2. 村上1993

村上1993は、虎明本に現れる因由形式（村上の用語では接続辞）について、その文体的な面や用法面での違いについて考察している。村上はまず虎明本の科白を独白と対白に分

け、それぞれにおける因由形式の現れ方をみている。また、条件節の述部を「候・なり」などの書きことば的なもの、「ござる・まらする・ぢゃ」などの話しことば的なものとに分け、それらと因由形式の関わり方を調べている。この結果、虎明本にみられる7つの因由形式、ホドニ、ニヨッテ、トコロデ、ニ、アイダ、ニヨリ、バは文体的意味の面で二つに分けられる。これをまとめると次のようになる。

（表３）

話しことば的接続形式	ホドニ・トコロデ・ニヨッテ・ニ
書きことば的接続形式	ニヨリ・アイダ・バ

村上は「意味の上からも構文的職能の上からも同じと見られる複数の表現が見られることから、虎明は当時広く用いられていた表現を標準的なものとし、あらたまりの表現やくだけた表現を随所にちりばめた」と述べており、虎明本に現れる因由形式の7つの形式については文体的、表現的違いという観点からこれらを見ているようである。

1.3. 中沢1996

中沢1996は『版本狂言記』を対象にホドニ、ニヨッテ、トコロデの3つの因由形式（中沢の用語では接続詞）について、その使用頻度、従属句の構造、使用者、使用場面という観点で考察している。ニヨッテが承接する従属句の構成要素は、比較的客観的な事実の描写に関わるものに限定され、ホドニが承接する従属句には、意志・推量などのモダリティ的要素もあるという結論は、小林1973の調査結果と一致するものである。中沢は方法として上接語だけでなく、従属句全体の構造という観点から因由形式の特徴をとらえようとしている。しかし現代日本語の階層論の分析法を用いながら、体系的な解釈を試みなかったのは残念なところである。

また、使用者・使用場面という面でみると、ホドニとトコロデには男女別、身分別の位相的使い分けは見られないが、ニヨッテの場合、目上の者に対し、目下の者が発話する場面での使用頻度が多いことから、あらたまった表現として受けとめている。ここから、中沢は中世語のホドニとニヨッテを現代語のカラとノデのように発話場面のあらたまり度と関連するものとしてとらえている。ニヨッテがあらたまった表現であるかどうかという観点で、中沢は小林、村上と意見を異にしているようである。小林、村上が狂言台本の中では比較的中世の口語を反映しているといわれる虎明本を研究対象にしているのに対して、中沢は江戸初期から中期までに刊行された『版本狂言記』を対象にしていることに起因しているのかもしれないが、『版本狂言記』の言語がどのような特徴をもっているのかについてはより深い吟味が必要であると思われる。

2. 目的

2.1. 本稿の観点と目的

以上、狂言台本を中心とした中世日本語の因由形式に関する先行研究を見てきた。それらは、因由形式における多様性を、まず文体的な面に基づいて考察しようとする立場にたっているということがわかる。中世日本語の因由形式において、文体的要素が重要な役割を果たしているということは、本稿でも認めるところである。しかし文体差をもとに、因由形式を口語的なものとそれ以外とに大きく二分した後にも、それぞれの文体に属する因由形式どうしではどのような違いが残るかということについては、詳しく考察されていない。また、因由形式全体を体系的にとらえようとする試みはなされていないようである。

この面で小林1973の研究は示唆的である。上接語と後件の現れ方の違いという小林の方法を他の因由形式にも適用し、因由形式の全体像に対する手がかりを得ることができると思われる。本稿では、小林1973で提示された上接語と後件の分析によるホドニとニヨッテの違いに対して、階層的な違いとしての解釈を試みる。さらに因由形式の階層的性質という観点から、ホドニ、ニヨッテをふくめた中世日本語の因由形式の体系について整理する。その際、因由形式の階層と体系を考える手がかりとして、虎明本の因由形式間の包含関係に注目したい。中世日本語の因由形式におけるこのような関係に関して指摘したものは見あたらないが、現代日本語における包含関係に対して指摘した研究には南1974、長谷川1998などがある。包含関係を通して、中世日本語の因由形式を体系的に整理しようとする際、現代日本語における従属句の包含関係に対する研究が、重要な手がかりになると思われる。

本論に入る前に、まず本稿で因由形式間の「包含関係」というのはどのような関係を意味するのかについて、虎明本の例によって説明する。

2.2. 包含関係について

虎明本では、つぎの1.の例のように［［P_1＋x］P_2＋y］P_3（P_1・P_2・P_3は句または節、x・yは因由形式）の構造をとる文がある。

1.（下京の女）たとへはどん太郎殿でも<u>ひさひさたよりもなかつた</u>（P_1）<u>によつて</u>（x）<u>にあはしきつまをもつた</u>（P_2）<u>程に</u>（y）、<u>あくる事はならぬ</u>（P_3）（どん太郎、虎明本、中257）[2)]

1.の例においてニヨッテ句［ひさびさたよりもなかったニヨッテ］は、P_3［あくる事はならぬ］に直接関係せず、まずP_2［にあわしきつまをもった］を帰結句としてとり、［ひさびさたよりもなかったニヨッテ、にあはしきつまをもったホドニ］という一つのより大きな句を成立させている。この［［P_1＋x］P_2＋y］というホドニ句が確定条件句

を構成し、帰結句であるP_3［あくる事はならぬ］に関係するのである。このように内側の条件句と帰結句が、一つの大きな条件句となるとき、内側の条件句［P_1＋x］と外側の条件句［［P_1＋x］P_2＋y］は「包含関係」にあるととらえ、［［～x］～y］あるいは［［x］y］のように表すこととする[3]。

虎明本では、このような包含関係において、ニヨッテとホドニが入れ替わるということは見られない。両形式間の包含関係が固定している理由を、本稿ではそれぞれの形式がもつ階層性によるものと考える。この点について、現代日本語の従属句における包含関係に対する研究も参考としたい。

3. 虎明本の因由形式の包含関係

以下では虎明本の因由形式の中で、その形態だけでは原因を表すのかどうかの判定が曖昧であるバ・テを除いた、ホドニ、アイダ、トコロデ、ニヨッテ、ニヨリ、ユエニの6種の因由形式を対象に、どのような包含関係が観察されるのかを見てみる。以下、虎明本に現れる包含関係を用例の多い順に考察する。

3.1. 虎明本に見える包含関係の例

3.1.1. ホドニとニヨッテ

ホドニとニヨッテが包含関係を成している例としては、1.の他にも次のようなものが見られる[4]。

2. 私はかやうの御使はゑいたすまいと申たれは、すでに御せいばいあらふと仰られたによつてぜひにおよばずもつてまいつた程に、それがしに御ぞうぶんはござるまひ
（ひつくくり、中184）

3. （亭主）みなわかひ衆の仰らるるは、いつもそちがきて、かしましう云所で、連歌がしまぬと仰らるるに依て、よばなんだほどに、ふるまいの時はこなたへよばうほどにそれまでは出事は無用じや　（ちぎり木、中199）

上の例はそれぞれ以下のような関係をもっていると考えられる。

2′　［［～と仰られたニヨッテ］～もつてまいつたホドニ］～ござるまい

3′　［［～と仰らるるニヨッテ］呼ばなんだホドニ］［～呼ばうホドニ］～無用じや

虎明本において、ニヨッテとホドニとが包含関係を成しているとみられるのは24例であるが、このすべてが［［ニヨッテ］ホドニ］の関係になっている。ここから虎明本におけるニヨッテとホドニの包含関係は、ニヨッテがホドニに包含される関係であると見られる。

3.1.2. ホドニとトコロデ

虎明本では、原因・理由を表すトコロデとホドニが包含関係を成している例は13例あるが、この中で12例が［［トコロデ］ホドニ］、1例が［［ホドニ］トコロデ］の包含関係になっている[5]。

4. （太郎冠者）御存のことく、すねにあかがりがきれてござる所で、水をみまらすれ共六こんへこたえてうづきまらするほどに、ましてやわたる事は、中々なりまらせぬ
（あかがり、中92）

5. （太郎冠者）それもたよりになりまらせず、身共をずでいどうとうち付てござる所であのだいてんもくのうへへころふでござる程に、なにがたまりまらせうずるぞ、あのごとくみぢんにくだけてござる所で、さだめてたのふだ人のかへらせられたらは、いつれも御せいばいなされうず　（ぶす、上271）

4. の例の包含関係は次のようである。

4′　［［あかがりが切れてござるトコロデ］～うづきまらするホドニ］～なりまらせぬ

5. の例は［［トコロデ］ホドニ］と［［ホドニ］トコロデ］の関係が一文中に現れる例である。この包含関係は次のようになっている。

5′　［［～うち付てござるトコロデ］～ころふでござるホドニ］たまりまらせうずるぞ

5″　［［～ころふでござるホドニ］～みぢんにくだけてござるトコロデ］御せいばいなされうず

このようにトコロデとホドニとの間には相互的な包含関係が成立するが、［［トコロデ］ホドニ］が13例の中の12例を占めていることから、トコロデがホドニに包含される傾向が強いと考えられる。

3.1.3. ホドニとアイダ

ホドニとアイダが包含関係にある例は6例みえるが、5例が［［ホドニ］アイダ］、1例が［［アイダ］ホドニ］の関係になっている。以下にその例をあげる。

6. （太郎冠者）御尤で御ざあるが、今こそさやうにおほしめす共、やがてお大名にならせらるる御ずいさうがござるほどに、その時は鑓長刀をもたせて、おともの衆がおほふ御ざあらふずる間、御ぐわいぶんもめでたからふと存ずる　（どんごむさう、中72）

7. （伯養）ここに某にお目をかけらるるおかたの御ざあるが、見事なびわをもたせられた程に、かつてかせと仰らるる間、ないないそのびわをやくそく仕た程に、かりてまいらばやとぞんずる　（はくやう、中431）

例6. 7. の文はそれぞれ次のような構造になっている。

6′　［［御ずいさうがござるホドニ］御ざあらふずるアイダ］めでたからふと存ずる

7′　［［借て貸せと仰らるるアイダ］～やくそく仕たホドニ］～ばやとぞんずる

アイダとホドニとは、3.1.2.のトコロデとホドニの場合のように、相互的な包含関係にあると見られる。しかし傾向としては、ホドニがアイダに包含されやすいと考えられる。

3.1.4. ホドニとユエニ

ホドニとユエニとの包含関係の例は2例あるが、2例とも［［ユエニ］ホドニ］になっている。

8. 所詮そなたにそうゆへに、わらはまでめんぼくをうしなふほどに、いとまをたもれといふて、いろいろとむれども、きかず、離別する　（祇園、上146）
9. 又ぢざうの御むさうには、今までの女にそふた故に、まうもくになつたほどに、あの女にそはずは、目をあけてとらせうと、御むさうであつたにより、おぼへずあつと申たれは、このことくにめがあひたと、女にあふた時にいふ　（かはかみ、中194）

8.9.の例はそれぞれ次のような包含関係をもつ。

8′　［［そなたにそうユエニ］～めんぼくをうしなふホドニ］いとまをたもれ
9′　［［今までの女にそふたユエニ］盲目になつたホドニ］～目をあけてとらせう

3.1.5. ニヨリとアイダ

ニヨリとアイダが包含関係を成す例は2例あるが、2例とも［［ニヨリ］アイダ］の関係になっている。これらは10′ 11′のような包含関係を成している。

10. （舅猿）今日吉日にて有により、みよしのよりむこ殿の御出にて候間、申付はやと存ずる　（猿聟、上387）
11. （藤三）かんせうじやうよにこえ、せいひきく御ざ有たるにより、跡さきとはたかうして、中ひきく候間しへいの大臣立もどつて、大納言殿と目を見合、中のひくきをつづみにたとへ、じよこと仰られ、どつと御はらひなされ候処に（うるさし、中221）

10′　［［吉日にてあるニヨリ］～むこ殿の御出にて候アイダ］～申付ばやと存ずる
11′　［［～せい低く御ざ有たるニヨリ］～中低く候アイダ］どつと御笑ひなされ候

3.1.6. ニヨリとニヨッテ

この他に［［ニヨリ］ニヨッテ］の包含関係が1例あり、12′のような関係になっている。

12. （酢売）某はあきんどのつかさをもつて有により、しやうばいをさせうさせまひは、身がままじやによつて、身共に礼をいはねはうらせぬぞ　（酢はじかみ、下76）

12′　［［～司をもつてあるニヨリ］～身がままじやニヨッテ］～売らせぬぞ

上で見てきたのは、虎明本に見える包含関係の中でも、異なる形式間の包含関係である。さらに虎明本には、以下のように同じ形式どうしが包含関係にある例が見える。包含関係を成している例は［［ホドニ］ホドニ］が22例、［［ニヨッテ］ニヨッテ］が4例である[6]。

3.1.7. ホドニどうしの包含関係

13. (親) そうじてむこ入には、人がみたがる物じや程に、かきからもどこからものぞかうほどに、かまひてをくするな、　(二人袴、上391)
14. おぢがいでて、よふたうへにまた是にて酒をのふだ程に、みちにねておらふ程に、みてまいらふと云てねているをみ付て、　(あく太郎、中346)

3.1.8. ニヨッテどうしの包含関係

15. (孫一) 面々に身体をかせぎまらするに依て、京いなかへまいつて、内にいまらせぬによつて、御身まいをもいたさひでぶさた仕てござる　(さいほう、上114)
16. (すつぱ) 身共は弟子あまたもつたに依て、方々へ参るによつて、宿にいる事はおりなひほどに、五条のいなば堂の、うしろ堂におかふ程に、あれへ御出あれ　(仏師、中355)

3.2. 用例のある包含関係

以上の結果をまとめると、虎明本で観察される6種類の因由形式間の包含関係は以下のようである。([[ホドニ] アイダ] 5／6とは、ホドニとアイダが包含関係になっている全6例の中に、5例が [[ホドニ] アイダ] の関係になっているということである。)

[[ニヨッテ] ホドニ]	24／24		
[[トコロデ] ホドニ]	12／13	[[ホドニ] トコロデ]	1／13
[[ホドニ] アイダ]	5／ 6	[[アイダ] ホドニ]	1／ 6
[[ユエニ] ホドニ]	2／ 2		
[[ニヨリ] アイダ]	2／ 2		
[[ニヨリ] ニヨッテ]	1／ 1		
[[ホドニ] ホドニ]	22		
[[ニヨッテ] ニヨッテ]	4		

虎明本でみられる因由形式間の包含関係は以上の10種類であった (異なる形式間の組み合わせ8種類、同じ形式間の組み合わせ2種類)。しかし、考察の対象とした6種の因由形式から考えうる包含関係はもっと多いはずである。6種の因由形式が2種ずつ組を成し包含関係を構成するとすると、理論的に考えうる組み合わせは36通りが可能である。

ニヨッテを中心に考えると、用例のある [[ニヨッテ] ホドニ]、[[ニヨリ] ニヨッテ]、[[ニヨッテ] ニヨッテ] の外に、[[ホドニ] ニヨッテ]、[[ニヨッテ] ニヨリ]、[[ニヨッテ] アイダ]、[[アイダ] ニヨッテ]、[[ニヨッテ] トコロデ]、[[トコロデ] ニヨッテ]、[[ニヨッテ] ユエニ]、[[ユエニ] ニヨッテ] の包含関係が考えられるが、虎明本にはこれらの例は見えない。これらの例は虎明本に現れないだけの偶然的なものであるのか、あるいは現れない何らかの理由があるのだろうか。こうした「用例のある組み合わせ」と「用

例のない組み合わせ」が生じる理由について、因由形式の階層性によって、ある程度説明が可能であると思われる。4章では現代日本語における階層論に基づき、虎明本に見える包含関係に対する説明を試みる。その前に、このような包含関係は、虎明本にだけ見られるものであるのかどうかを考えてみたい。以下ではキリシタン資料に現れる因由形式の包含関係を見ておく。

3.3. キリシタン資料の因由形式間の包含関係

『天草版平家物語』では、ホドニとニヨッテとが包含関係にある例は5例になるが、この5例がすべて［[ニヨッテ］ホドニ］の関係になっている。また、『天草版伊曽保物語』にも、［[ニヨッテ］ホドニ］が1例あるが、その逆の例は見えない。

17. この両条わ前代未聞の狼籍でござるによって、罪科に行わせられいでわかなわぬ儀ぢゃほどに、官位をもはがせられいでわかなうまじいとまっくろに訴えられた
（平家物語、巻一）

18. 宮の御謀叛すでにあらわれさせられたによって、官人どもがただいまを迎いに参るほどに、急いで御所を出させられて、三井寺え出でさせられい：それがしも子どもを引き具してやがて参りまらしょうずると、書いたれば　（平家物語、巻二）

19. ある時、かの獅子王山中で繼に掛かり、進退ここに窮ったによって声を上げて叫ぶほどに、くだんの鼠が聞きつけて、急ぎそのほとりに走り来て、獅子王に礼をないて言ふは、　（伊曽保、獅子と鼠の事）

以上の例から、虎明本に現れるホドニとニヨッテとの包含関係は、キリシタン資料においても見られるものであることがわかった[7]。

4. 階層論的観点から見る虎明本の因由形式

4.1. 現代日本語の従属句における階層論について

南1974では、現代日本語の従属句は、その構成成分によってA類、B類、C類の3種類に分類されるとしている。ある従属句が何類に属するのかを決める際には、従属句内部の構造、従属句の構成成分が基準となる。

A類：従属句の中に、述部の成分として使役の（サ）セル、受身の（ラ）レル、などが含まれる。述部以外の成分としては、対格のヲ、与格のニ、状態副詞までが含まれる。

B類：A類の従属句に含まれない否定のナイ、テンスの助動詞タなどが述部の成分として現れ、述部以外の成分として主格のガ、時の修飾語、場所の修飾語、程度副詞などが現れる。

C類：B類の従属句の成分として含まれない、推量の助動詞ダロウ、主題のハ、陳述副詞タブンなどが、C類の従属句の成分として現れる。

南は包含関係について詳細なことは述べていないが、上の従属句の構造をもとに従属句間の包含関係を「含み含まれ」関係として、簡単に述べている。これによると、従属句が他の従属句の一部となる場合には、C類がA類、B類を含むことはできてもその逆は成立しない。また、B類はA類を含むことができるが、その逆は成立しない。同じ類どうしの従属句では相互的な「含み含まれ」関係が成立する。

実際の従属句の包含関係は、南が上に述べたように簡単に処理できない側面が多い。同類の従属句の包含関係についても、相互的包含関係ではないものが現れるなど、解決すべき問題は残っていると思われる[8)]。しかし従属句を体系的に把握しようとする際には、南の階層論的な考え方がもっとも有効であると思われるので、ひとまずこの観点から虎明本の因由形式とその包含関係について考えてみることにする。

4.2. 階層論的観点から見る虎明本の因由形式

以下では、虎明本に現れる因由形式間の包含関係が、階層論的観点ではどのように説明できるかを考察する。まずそれぞれの因由形式が、南の従属句の分類の観点からどのように分類できるかについて考えてみる。すなわち、推量・意志を表すウ・ヨウ、ウズル、マイなどがその従属句の述部の成分として入ることができる場合、その従属句をC類とみる。このような要素が従属句の中に現れない場合は、否定の助動詞ナイ・ヌ、テンスの助動詞タ・キ、その他、主格などが従属句の中に含まれているかどうかをみてA類かB類かを判断する。

4.2.1. 虎明本の因由形式の分類

ニヨッテ・ニヨリ・ユエニの場合、承接する従属句の述部にウ・ヨウ・ウズルなどの推量・意志の助動詞をもつ例はない。しかし否定の助動詞ナイ・ヌ、テンスの助動詞タ・キ、主格などはそれらの従属句の中に現れる。したがってニヨッテ・ニヨリ・ユエニはB類に分類できる。

20. （太郎冠者）くせ事じやあらふと仰られたに依て一しほわごりよにあひたひ
（ひの酒、上276）

21. （饅頭売）惣じてあきなひものあまた御ざれども、私はもとでがござなひにより、是をあきなひに仕る　（まんぢう、上300）

22. （男）それはにがつた事で御ざる、そのもとでがござらぬゆへに、ねがふ事で御ざる
（福の神、上36）

23. （瓢の神）われふくべの神ともいはれし故に、はちたたきどもしんしてあゆみをはこぶ心ざしやさしければ、すがたをおがませんため、是まで出たるぞとよ
（はちたたき、上142）

上に見るように従属句の成分からニヨッテ・ニヨリ・ユエニはB類であると考えられる。

しかし、後件との関係の中ではこの3形式に差がでてくる。3形式の中で、ニヨッテの後件には推量、願望の表現が出てくる例が見られる[9]。

24. さては同じことくにいふが、こはだかに云に依て、きくものじやあらふほどにと云て、そつとささやくていなり　（ながみつ、下9）
25. （太郎冠者）さてわごりよのすいのことくじやあらふず、此間よりそとへいでたらは、くせ事じやあらふと仰られたに依て、一しほわごりよにあひたひ（ひの酒、上276）

24. 25. の例に見るように、虎明本においては、ニヨッテの後件として推量・願望の例が見られる。階層論の立場は従属句の構造により重点をおいているのでニヨッテはB類とみるべきであるが、このような後件の現れ方は包含関係にも影響を与えるものと考えられる。ユエニ・ニヨリにおいては、後件に推量などのくる例は1例もない[10]。このような観点からみると、虎明本におけるニヨッテは、ユエニや現代語のノデ・タメニに比べてよりC類的なB類といえるだろう[11]。

一方、ホドニ・トコロデ・アイダの場合、それらが承接する従属句の述部には推量・意志の助動詞ウ・ヨウ・ウズル・マイなどが盛んに用いられている。したがってこれらの因由形式はC類に分類される。また、これらは後件の種類を選ばず、推量・意志・命令・依頼などが使われている。

26. （奏者）さりながら国をとはふほどにこたへい　（昆布柿、上53）
27. （子）一つたべてみたひが、定て数がさだまつてあらふところで、おやじや人のあづかられたにしかられう　（かうじだわら、下56）
28. （聟）近此かたじけなひ、家をは随分もりたてうずる間、心やすふおほしめせ（さひの目、上378）

4. 2. 2. 階層論からみる包含関係

以上のように、虎明本において原因・理由を表す接続形式は階層論の立場から見ると次のように分類できる。

（表4）

B類	ユエニ・ニヨリ・ニヨッテ
C類	トコロデ・ホドニ・アイダ

この分類によって、虎明本に現れる包含関係を整理しなおすと、Ⅰ. 異なる階層の因由形式間に成立する包含関係と、Ⅱ. 同じ階層の因由形式間に成立する包含関係の二つのグループに分けられる。

Ⅰ．異なる階層の因由形式間に成立する包含関係

［［ニヨッテ］ホドニ］　［［ユエニ］ホドニ］　［［ニヨリ］アイダ］

Ⅱ．同じ階層の因由形式間に成立する包含関係

［［トコロデ］ホドニ］　［［ホドニ］トコロデ］

［［ホドニ］アイダ］　［［アイダ］ホドニ］

［［ニヨリ］ニヨッテ］　［［ホドニ］ホドニ］　［［ニヨッテ］ニヨッテ］

こうしてみると、Ⅰは、B類とC類間に成立する包含関係であるために、［［B類］C類］の一方的な包含関係になっており、Ⅱは、同類どうしの包含関係であるために、C類の形式間などでは、相互的なものになっていると解釈できる。

現代日本語に対する階層論では、同類の従属句は相互的含み含まれ関係を持つとしているが、3.2.に見られるように、虎明本では、同じC類に属するホドニとトコロデが［［トコロデ］ホドニ］の方に、アイダとホドニが［［ホドニ］アイダ］の方に偏りをみせている。同じ類に属する因由形式間の包含関係に偏りが見えることから、同類の中での階層も想定することができるのではないだろうか。すなわち、C類の中でもB類寄りのより内側のもの、C類の中でもより外側に位置するものがあると考えられる。ホドニを標準的なC類とみなすと、トコロデがC類の中でもより内側のC類、アイダがより外側のC類として位置づけられる。また1例だけではあるが、ニヨリとニヨッテの包含関係に対してもこのような観点から見ることができるだろう[12)]。

ここまで考察してきたことから、因由形式の階層は①従属句の構造②後件の表現性、そして③因由形式間の包含関係から考えられる。因由形式の階層という観点から、虎明本の因由形式を表にまとめると、次のようになる。

（表５）

包含される←					→包含する
B類			C類		
ユエニ	ニヨリ	ニヨッテ	トコロデ	ホドニ	アイダ

5. まとめ

以上の考察をとおして、虎明本の因由形式には、先行研究で言及されてきた文体的側面だけでなく、階層的な側面をもっているということが明らかになった。虎明本の6種類の因由形式間の包含関係を、階層という観点から、上の表５の順序に合わせて整理すると、表６のようになる。（◎は虎明本に用例のある組み合わせの例、○は用例の少ない例、×は虎明本に用例のない例、＊は文章語的表現に分類される形式）

（表６）

前＼後		B 類			C 類		
		ユエニ*	ニヨリ*	ニヨッテ	トコロデ	ホドニ	アイダ*
B類	ユエニ*	×	×	×	×	◎	×
	ニヨリ*	×	×	○	×	×	◎
	ニヨッテ	×	×	◎	×	◎	×
C類	トコロデ	×	×	×	×	◎	×
	ホドニ	×	×	×	○	◎	◎
	アイダ*	×	×	×	×	○	×

6種類の因由形式から考えられる包含関係の組み合わせは、上の表でみるように36種類になるが、まず左下の用例が一例もないことがわかる。それは、C類の因由形式がB類の因由形式に包含されることがないからである。つまり、B類の因由形式であるユエニ・ニヨリ・ニヨッテと、C類の因由形式であるトコロデ・ホドニ・アイダに［［C類］B類］の包含関係が成立しないために、左下の例が一例もないのである。

「用例のない組み合わせ」のもう一つの要因としてあげられるのは、先行研究でも指摘されてきた文体的要因である。本稿で考察の対象とした6種類の因由形式は、1. の先行研究で見てきたように、文体的に二つに分類されている。代表的な例として、小林1973の分類をあげてみる。（表２参照）

（表７）

口語的表現	ニヨッテ・トコロデ・ホドニ
文章語的表現	ユエニ・ニヨリ・アイダ

表６に見るように、*印で示した文章語的表現に分類されるユエニ・ニヨリ・アイダと、口語的表現に分類されるニヨッテ・トコロデとの間に包含関係がないことは、文体的要因で説明できる[13]。ただし、本稿で見てきたように、ホドニの場合は、他の口語的表現とされる形式とも、文章語的表現とされる形式とも包含関係を成している。このような面から、先行研究で口語的表現とされてきたホドニは、口語としても文章語としても用いられる中立的表現と見るべきであろう。ホドニを中立的なものと考え、文体別に包含関係をまとめると、以下のようになる。

（表８）口語的表現の包含関係（太い線はB類とC類の境界線）

前＼後	ニヨッテ	トコロデ	ホドニ
ニヨッテ	◎	×	◎
トコロデ	×	×	◎
ホドニ	×	○	◎

（表９）文章語的表現の包含関係（太い線はＢ類とＣ類の境界線）

前＼後	ユエニ	ニヨリ	ホドニ	アイダ
ユエニ	×	×	◎	×
ニヨリ	×	×	×	◎
ホドニ	×	×	◎	◎
アイダ	×	×	○	×

文体別にまとめた表８、表９の二つの表において、左下の［［Ｃ類］Ｂ類］の包含関係の例が見えないのは、表６と同じく、虎明本の因由形式の階層性からくる必然的な空白と考えられる。その他の組み合わせにおける空白に関しては、虎明本の文献的性格やその他の理由を考えるべきであろう。

さらに、本稿で見てきた虎明本に見える因由形式の階層も、時代によって変化する可能性がある。たとえば虎寛本ではニヨッテが、『改修捷解新語』ではニヨリがＣ類としての用法をもっている例が見られる[14]。因由形式の階層が変わることによって、包含関係の変化も考えられることである。ここでは論じなかったテやバを含めた、全体的な中世日本語の因由形式の体系をとらえる問題とともに、このような問題も考えて行きたい。

注

1) 虎明本では原因・理由を表す接続形式として、アイダ・ユエなど、名詞的なものも現れることから、接続助詞とせず、接続形式と呼ぶこととする。（村上1993参照）

2) 以下、虎明本からの引用の際は出典を略す。また、狂言台本などの引用の際、縦書きは横書きに改め、踊り字、反復の表示などを相当する文字にかえた以外は原文のままとした。ただし因由形式は、論の中ではニヨッテ、ユエニなどとカタカナで表記する。

3) 包含関係が成立するかどうかを判断するには、条件句と帰結句の意味内容が問題になるが、ｘ、ｙの位置にそれぞれどのような接続助詞がくるのかによって決められる場合もある。以下の例では、1.の例だけが包含関係の例である。

1. 時間があったので、撮影会に行ってみたら、行事は取りやめになっていた。
2. 時間があったので、撮影会に行きながら、用事をすませた。
3. 時間があったけれども、撮影会に行ってみたら、遅刻であった。

4) 次の例では、一文中にニヨッテ・ホドニが使われているが、包含関係は成立していないと考えられる。

1. 色々いへどもみせぬに依て、さあらは是まできた事じや程に、うちへいれず共、そとからもみゆるほどに、おなじ事、そとにて花見せうと云て、わき上面へならび、さかもりする
（花折新発意、中378）

上の例の場合、「さあらは～花見せう」は引用句であるので、ニヨッテとホドニとの包含関係は成立しない。また、「さあらは～花見せう」の中の２例のホドニは並列であって、包含関係ではない。

5) 虎明本に用いられるトコロデの中には原因・理由を表すというよりも、「～すると、～したところ」という偶然確定条件を表している例もある。偶然確定のトコロデとホドニとが包含関係を成している例は３例あるが、この中で２例が［［ホドニ］トコロデ］、１例が［［トコロデ］ホドニ］の関係に

なっている。たとえば、次のような例がある。

1. （鎌倉）まづ某のかうやくのいげんは、みなもとのよりともの、御ひさうの御馬に、いけづきするすみと申て、銘馬のありたるを、御せめなされ候時、かのいけづきがとつて出た程に、のりても難儀におもふでおちられた所で、いけづきこくうをさしてかけて行　（かうやくねり、下80）

本稿ではこのような例は考察の対象にしないこととする。

6) その外に、トコロデどうしが包含関係にあると見られる例が2例ある。

1. （太郎冠者）さりながら、おざしきへもつてまいらふ所で、やい太郎くわじや、あぢもよひかと仰られう所で、しらぬと云たらは、ふ調法にあらう、一つくふて見う　（栗やき、中104）

しかしこの例の最初のトコロデは偶然確定条件と解釈できるので、この場合は因由形式間の関係とは考えない。したがって同じ形式間で包含関係がみられる因由形式は、ホドニ、ニヨッテの2形式になる。

7) キリシタン資料では、ニヨッテとトコロデの包含関係の例も見られる。『天草版平家物語』では、4例のうち、3例が［［ニヨッテ］トコロデ］、1例が［［トコロデ］ニヨッテ］となっている。『天草版伊曽保物語』では、3例のうち、2例が［［ニヨッテ］トコロデ］、1例が［［トコロデ］ニヨッテ］になっている。

1. 宮のをんくびわ宮のをん方え常に参りかよう人がなかったによって、見知りまらしたものもなかったところで、定家とゆう医師が一とせ御療治のために召されたれば、さだめてそれが見知りまらしょうずとゆうて、呼ばれたれども、所労と申して参らなんだれば、（平家物語、巻二）
2. 約束をしたことなれば、五番目でひたと受けとめて、敵を中にとりこめて、前後から一度に関をどっとつくったところで、行家今わのがれうずるかたがないと思われたによって、命も惜しまず、面もふらず、ここを最後と防ぎ戦わるるを、　（平家物語、巻三）
3. またある時、その主人外から帰られたれば、その膝に上り、胸に手を掛け、口を舐りなどして、いとなれなれしい体であったによって、主人いよいよ愛せられたところで、櫨驢馬この由を見て、羨む心が起こったか、　（伊曽保、狗と馬の事）

小林1973が述べているように、キリシタン資料においてトコロデは原因・理由を表すのでなく「～すると」「～したところ」の意味の偶然確定を表す用法で使われる例が多い。上の諸例においてもトコロデを偶然確定として解釈できるものがあり、原因・理由を表すトコロデのふるまいとは異なる可能性も考えられる。しかしニヨッテとトコロデとのこのような包含関係は、ニヨッテとトコロデの階層的性質からくるものとも考えられる。

8) たとえば、確定条件のノデと仮定条件のバは同じくB類に属するが、その含み含まれ関係は相互的でないように思われる。（＊はその解釈が成立しないことを意味する）

1. 太郎は頭がいいので、勉強すれば、きっと合格するでしょう。
   a. 太郎は［頭がいいので］［勉強すればきっと合格するでしょう］
   b. ＊太郎は［［頭がいいので］勉強すれば］きっと合格するでしょう
2. 勉強すれば、実力も上がるので、きっと合格するでしょう。
   a. ［［勉強すれば］実力も上がるので］きっと合格するでしょう
   b. ＊［勉強すれば］［実力も上がるのできっと合格するでしょう］

上の例文1.2.をそれぞれ a.のようには解釈できるが b.のように解釈することはできない。上の例からみるように、同じ類に属する従属句においても相互的な包含関係が成立しないものがある。同じ類の中での階層性についても考えてみる必要があるように思われる。長谷川1998は、現代文の実例の中で従属句を2つ以上含む文を抽出し、従属句間の関係を明示する複文規則を設けようとする。これによれば、A、B、C類間の包含関係に対する南の規定はほとんどが当てはまるものであるが、一部の例外があり修正の必要性があるものもあるとしている。

9) 南は、文の述部を描叙（素材である対象を描く段階）、判断（肯定・否定、過去認定、推量を表す段階）、表出（感動、願望、意志などを表す段階）、伝達（通達、命令、依頼などを表す段階）の4段階に分けている。そして、前の3段階はA類、B類、C類の従属句の構造の段階に対応するとしている。南の階層論では、従属句と文全体の述部との関係は考慮されていないが、本稿では、後件との関係で同類の確定条件句の従属句の中に段階が付けられる可能性もあると考える。すなわち、後件に推量、意志、命令、依頼などがくるということは、同じB類の従属句であっても、C類寄りのB類である可能性があると考える。

10) ニヨッテの後件として、命令がくるとも見られる例がある。

1. （聟）今日さいじやう吉日じやに依て、参れとおしやつた程に、むこがまいつたと申せ
（鶏聟、上334）

2. （親）今日日がよひに依て、しうとのかたより汝にむこいりをせいといふてきた、其こしらへをして、急でゆけ　（二人袴、上390）

1. の例の場合はニヨッテ句の後件として、①参れ、②おしやつた、ホドニ句を挿入句と見ると③むこがまいつた、の3通りの解釈が可能だと思われる。

2. の例は、ニヨッテ句の後件として①せい、②いふてきた、の2通りの解釈ができる。1. 2. いずれも結論を保留することにする。また、ニヨリの後件として推量がきていると考えられる例があるが、解釈のゆれるところである。

3. （舅）是は此あたりにすま致す者でござる、今日さいじやう吉日でござるにより、聟殿のおいでなされうずるとのおことじや　（鶏聟、上331）

11) 南1990ではノデに関して「ノデには～ハが現れることから、一応B類に入れておくとしても、C類に近い性格のものとすべきかもしれない」としている。この「C類に近い性格のもの」を本稿ではC類的なB類と考える。（南1990、p59）

12) 虎明本には、ニヨリとニヨッテが一文中に使われる例が1例ある。本稿では［［ニヨリ］ニヨッテ］の包含関係として扱ってきたが、これに対しては別の考察を加えるべきかもしれない。この例は以下のようである。（本文の3. 1. 6. 参照）

1. （酢売）某はあきんどのつかさをもつて有により、しやうばいをさせうさせまひは、身がままじやによつて、身共に礼をいはねはうらせぬぞ　（酢はじかみ、下76）

この例は、話し手である酢売りの感情がしだいに高揚してゆくのを表すための意図的なものと解することもできる。そのような観点から見ると、この例は、［［ニヨリ］ニヨッテ］の包含関係としてではなく、［［ニヨッテ］ニヨッテ］の一つの変形とすることができるが、より考察を要する。

13) ニヨリとニヨッテに関しては注12参照。

14) 小林1973でも指摘されているように、虎寛本では、ニヨッテ句の述部に推量・意志の助動詞ウが現れる。（小林1973、p37）

1. （主）イヤ、先待て。身共も奇特が見度い程に、是を汝にかして遣うに依て、着て見せい。
（虎寛本、隠れ笠、上127）

このようなニヨッテ句の構造における変化が、虎寛本における包含関係の変化にもつながっていると考えられる。

2. （舅）ハア、聟殿は真人じやと聞たが定て誰そなぶつておこされた物で有う。某もあの通りせずは、舅は物しらずじやと云れう程に、あの通りするに依て、次の者に必ず笑らふなといへ。
（虎寛本、おんぎよくむこ、中215）

虎寛本の言語は、中世の言葉を狂言の舞台用語として残しつつ、江戸時代の言葉を反映する特殊なものとされているが、因由形式間の包含関係においてもその傾向が現れていると考えられる。虎寛本と同時期に刊行された『改修捷解新語』では、ニヨリの述部にウ・マイなどが使われている。

3. 看品をすめましたらば、宴享も被成ませうに、日も晩じませうにより、早ふ御仕舞被成て御出被成ませい。　（巻二、25ウ、本文は『三本対照捷解新語　解題篇』の重刊本による）
4. 礼儀においてはさうではなけれ共、今日寛と坐らしやれましても礼には成りまするまいにより、坐て寛りと語りませう。　（巻三、10オ）

参考文献

『大蔵虎明本狂言集の研究』上・中・下、池田廣司・北原保雄著、表現社、1972、1973、1983

『大蔵虎寛本能狂言』上・中・下、笹野堅校訂、岩波文庫、1942、1943、1945

『キリシタン版エソポのハブラス私注』大塚光信著、臨川書店、1983

『天草版平家物語対照本文及び総索引　本文篇』江口正弘著、明治書院、1986

『三本対照捷解新語　本文篇』京都大学国文学会、1972

『三本対照捷解新語　釈文・索引・解題篇』京都大学国文学会、1973

『改修捷解新語』京都大学国文学会、1987

大倉浩(1997)　「語法・用語から見た『狂言記外篇』—三百番集本系の曲の位置付け—」『文芸言語研究　言語篇』31

北原保雄(1981)　『日本語助動詞の研究』大修館書店

来田隆(1993)　「洞門抄物に於けるホドニとニヨッテ」『近代語の成立と展開』和泉書院

小林千草(1973)　「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94

小林千草(1994)　『中世のことばと資料』武蔵野書院

田窪行則(1987)　「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5

中沢紀子(1996)　「『版本狂言記』における原因・理由を表す表現　—「程に」と「によって」を中心として—」『学習院女子短期大学国語国文論集』25

永野賢(1952)　「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29-2

長谷川守寿(1998)　「接続表現に基づく複文規則とそのグループ化」『文芸言語研究　言語篇』33

原口裕(1970)　「「ノデ」の定着」『静岡女子大学研究紀要』4

松下大三郎(1928)　『改撰標準日本語の構造』勉誠社復刊、1978

南不二男(1974)　『現代日本語の構造』大修館書店

南不二男(1990)　「日本語の複文」『国文学　解釈と鑑賞』55-1

村上昭子(1993)　「『大蔵虎明本狂言集』における接続辞について　—「間」「程に」を中心に—」『松阪大学女子短期大学部論叢』31

吉井量人(1977)　「近代東京語因果関係表現の通時的考察—カラ・ノデを中心に」『国語学』110

（1998年9月28日　受理）